

田邊恵子：一冊の、ささやかな、本  
ヴァルター・ベンヤミン『一九〇〇年ごろのベルリンの幼年時代』研究  
(みすず書房、2023年)

前 田 良 三

『一九〇〇年ごろのベルリンの幼年時代』（以下、著者に倣い『幼年時代』と略記）はベンヤミン研究において閑却されてきた作品ではない。事情はむしろ逆で、アドルノが編集した二巻本『著作集』（一九五〇年）に収録され世に知られて以来、つねに彼の代表的著作のひとつと見なされてきた。特に「都市」、「記憶・想起」、「身体」、「言語」をはじめとするベンヤミンの思想の基本的トポスをめぐる議論のなかでくりかえし参照・言及され、そこに登場する「せむしの小人」や「ムンメレーレン」は、彼の思考の独自性を解く鍵として常に引用される思考像となった。さらにベルリンの都市文化論にとって『幼年時代』は世紀転換期のこの都市に関する重要な証言の源泉のひとつでありつづけている。

しかしこれとは対照的に、『幼年時代』およびその「準備稿」である『ベルリン年代記』（同じく『年代記』と記す）の内容および記述方法そのものに対する詳細な分析と包括的な考察は、初期言語論や翻訳論、『ドイツ悲劇の根源』、あるいは『複製技術時代の芸術作品』、さらには『パサージュ論』などと比較するとまだ手薄であるというのが、評者もその一人である非専門的ベンヤミン読者の印象ではないだろうか。『幼年時代』に対する多くの研究者のこれまでの姿勢は、ある意味でこれら「主要著作」を解読するための——きわめて高い価値が認められているとはいえ——「資料」に対するそれだったと言うべきかもしれない。さらに亡命前夜の一九三二年から三八年まで長期にわたり執筆と推敲が続けられるという複雑な成立過程を経るうちに内容の異なるいくつものバージョンが残されたため、この作品を「生成段階にある未完の作品」と見なす見解もいまだに根強いとされる。こうした見解も『幼年時代』の資料としての評価と無関係ではないだろう。

田邊恵子の『一冊の、ささやかな、本』はこれらの見方に決して声高ではないが決然たる「否」を突きつける。著者は『幼年時代』を「〈一冊の書物〉として完成させたのちに出版する」という一貫した目標とともに執筆・推敲された著作とみなし、それを「ベンヤミン独自の執筆方法と、亡命の経験が契機となって深化した思想の分ち難いむすびつきによって構想された」一書として徹底的に読み解こうとする。それにより『幼年時代』が単なる「資料」でも通常の「自伝」でもなく、最終稿（一九八一年に発見された「パリ・タイプ稿」）において完結した「作品」として読まれるべき権利を有する書物であることを明らかにしようとするのである。著者によれば、それはみずから「一冊の、ささやかな、本」（一九三二年十一月一日アドルノ宛書簡）と呼んだこの作品と書物というその形式に込められたベンヤミンの「執念」あるいは「真意」を追う作業ということになる。本文だけで三五〇頁を超える本書は、その主題と構えにおいて『幼年時代』の——少なく

とも日本語で出版された——初めての本格的な研究書だと言えよう。

こうした問題関心と主題設定からおそらく必然的に導き出された方法なのだろうが、本書の論述は「なぜ『幼年時代』という書物が書かれなければならなかったか」という問いへ向けてひたすら収斂してゆく。これは個々の作品から出発しつつもベンヤミンの思考全体をひとつのネットワークあるいはコンステレーションとして描き出そうとする多くの研究とは逆の方向を向いている。つまり、これらの研究においては個々の著作や個別概念・思考像が思考システム全体のなかに位置づけられることになるのに対し、本書ではベンヤミンの思考システムそのものが『幼年時代』という一冊の書物の強力な磁場へと引き寄せられているのである。著者がきわめて意識的に選択したこの「求心的」論述方法に本書の特質があり、この方法によって著者は『幼年時代』という作品にひとつの明確な輪郭を与えようとする。

本研究を可能にしたのは、著者も明記しているように二〇一九年二月に新たなズーアカンパ版『批判版全集』（*Werke und Nachlaß. Kritische Gesamtausgabe*、以下『新全集』と記す）第十一巻として刊行された『ベルリン年代記／一九〇〇年ごろのベルリンの幼年時代』である。この出版により『年代記／幼年時代』に関連する現存するすべての資料（手稿、メモ、タイプライタ稿など）が活字化された。またこれと並んで、ベルリン芸術アカデミーのベンヤミン・アーカイヴに所蔵されている『幼年時代』関連資料がウェブサイト *Walter Benjamin-online* でアクセス可能になった。これにより『幼年時代』の全貌がようやく明らかになり、研究の「文献学的」かつ「データベース的」基礎が定まったと言えるだろう。

本書の「序論」はまずベンヤミン作品の研究史・受容史を概観し研究の主題を簡潔に提示する。それに続き『新全集』に収録されたあらゆるヴァリエントを四つのカテゴリーに区別しそれらの異動を整理したうえで、『幼年時代』の生成過程を丹念に再構成してゆく。著者はこの作業を通して、一九三二年スペイン・イビサ島で成立した『年代記』が扱う対象や回想方法の点でまだ「覚書」ないし「メモ書き」の性格を強くとどめているのに対し、一九三三年の「ベルリン・タイプ稿」（「暫定的完成稿」）と一九三八年の「パリ・タイプ稿」は「完成稿を意図する明確な目的意識のもとで」成立した原稿であるとの見解を導き出し、この生成過程を「覚書」から一冊の「書物」へのそれと規定する。つまり著者によれば、これまでしばしば曖昧に一括りにされてきた『年代記』と『幼年時代』は実は明確に区別されるべき二つの異なった作品であり、前者から後者への移行は単なる「推敲」や技術的な「加筆・修正」によるものではなく、明確な方法意識に基づいた「書き直し」・「削除」の必然的結果なのである。

複数のヴァリエント間の外見上の相違として確認されたこの「書き直し・削除」が『幼年時代』という書物をどのように内在的に特徴づけることになるか——「序論」に続く「第一部 「故郷」の削除——回想方法」の論述はこの問いをめぐって展開する。すなわち書き換えがなぜ原理的に「削除」という形をとるのかという問いが、作者としてのベンヤミンの回想と叙述の双方に関わる方法論の問題として論じられる。これに対して「第二部

ベンヤミンの〈子どもの世界〉——主人公」では、『幼年時代』の「主人公」が子どもであることの意味と特性が何よりも歴史叙述に関するベンヤミンの思考との関連で考察される。最後に「第三部 「一冊の、ささやかな、本」——形式」では、ベンヤミンが執着した書物という形式のもつ意義が、彼自身も置かれていた「亡命状態」における文学行為の可能性という観点から取り上げられる。

第一部で著者が『年代記』と「パリ・タイプ稿」の綿密な比較によって明らかにしようとするのは、前者に加えられた「書き換え・削除」がベルリンを「故郷」ならざるものとして回想しベルリン空間における自己の経験を「自伝」ならざるものとして記述するというベンヤミンの意図と密接に結びついた書記行為だということだ。『幼年時代』記述のこうした意図は「パリ・タイプ稿」の「まえがき」——著者によれば「方法論的序説」——に明確に記されている。それは「故郷」に対する「郷愁」あるいは「憧憬」の抑制によって現れる「個人的体験に還元されない『大都市における幼年時代のイメージ』」の記述法である。

著者は、たとえば『年代記』には存在した「学友たち」の紹介や青年運動に関するエピソードが『幼年時代』ではまったく「削除」されているという事実を取りあげ、この「削除」はかつて自らも参加したヴィネケン派青年運動に対するベンヤミンの反発・批判（抹消すべき記憶）に基づくものではないと指摘する。著者はむしろそこに青年運動期に交流したもっとも重要な友人であったフリードリヒ＝クリストフ・ハインレに対するベンヤミンの「真の回想」の形式を見ようとする。

ハインレは第一次世界大戦勃発直後、青年運動の活動拠点であった「ハイム」で自殺を遂げる。ベンヤミンの青春時代に「決定的な終止符を打つことになった」事件であった。著者は、ベンヤミンが友人と「ハイム」（「故郷」でもある）というふたつの喪失を追悼という形で主観的に物語化（＝過去化）する試みに挫折した後、それを不十分な回想形式として放棄し、「喪の不可能性」を「反復的現前化の可能性」というより本質的な回想方法として発見したという解釈を示す。「削除」という回想方法の選択はその結果なのである（『幼年時代』におけるこの回想方法は、評者の印象では、後にロラン・バルトが『明るい部屋』において主題化する「それはかつてあった」という写真的現前＝記憶の形式につながってゆくように思われる）。さらにこうした「削除」と並んで、一人称主語の「わたし」と作者ベンヤミンの同一性が希薄化し、それに代わってメディア（たとえば写真）によって記録されるような匿名的形象としての「わたし」が語り手として浮上してくると指摘される。

この意図的な「削除」は、プルーストに由来する「無意志的記憶」との向き合い方の変化という観点からも考察される。著者は『プルーストのイメージについて』（一九二九年）を読み解きつつ、ベンヤミンがプルーストにおける「無意志的記憶」のイメージの特性を突発性と過去のイメージの「拡大性」という点に見だし、このイメージが出来事の固有の文脈から逸脱した「瞬間」として意識される点に新たな「回想」記述の可能性を認めていたことを確認する。著者によれば、『年代記』においてはこうした「回想」が「かつて

あったものにおける終わりなき書き込みの能力」、すなわち思い出の「無意志的＝自由」な拡大とされていたとすれば、『幼年時代』ではこの「拡大」としての「書き込み」の方法がまったく姿を消し、「削除」、つまり「拡大」の対極に位置する「意図的縮小」が回想記述の原理となる。こうして本書は『年代記』から『幼年時代』への移行のもつブルースト的回想からの転換という——これまで中心的に論じられてこなかった——側面とその意味を丁寧に跡づける。

第二部では『幼年時代』に登場する子ども像が「ベンヤミン思想の集大成」と規定され、彼の執筆動機と思考システムにおけるさまざまな脈絡との関連において包括的に分析される。子どもはベンヤミンの思考にとって重要な意味をもつ像であるが、従来の研究でもくりかえし指摘されてきた通り、何よりもまず「未熟な言語能力や、模倣を顕著な例とする独自の身体性」において捉えられた存在である。著者はこうした子ども像の「凝縮した形象」が『幼年時代』の「主人公」として選択されたことに、ナチス政権成立後という「同時代」に対するベンヤミンのメッセージを見ており、それをナチズムにおいて暴力的に肥大した神話的なものに対する批判であると解釈する。

ファシズム的神話の暴力性に対する批判をこめた形式としてベンヤミンの思考において重要な意味をもつのが「メールヒェン」である。しかしこの「メールヒェン」はルソーを嚆矢としてドイツ・ロマン派によって定式化された「純粹無垢＝自然」な子ども像の相関項ではない。著者は、ベンヤミンが子どもの「純粹無垢性」を自然対歴史という「二項対立構造」から切り離し「無作法で非人間的なもの」の源泉として再定義していることを確認し、「メールヒェン」が「野蛮」な子どもに固有の物語形式として選び取られたとする。つまり子どもには「神話世界の暴力」に立ち向かう「巧妙さと大胆さ」を発揮することが期待されており、かれらが遊びの過程で作り上げる世界こそ神話に対する「屑産物」であるメールヒェンなのだ。

ベンヤミンにおける子ども像の基本的性格をこのように確認した後、第二部では「野蛮」な子どもが作り上げる「屑世界」の諸相が『幼年時代』における「児童書」、「蒐集」、「言葉遊び」などに関する記述に即して分析されてゆく。それらの最後に置かれた『戦勝記念碑』の分析においては、この記念碑が記憶・表象しようとする世界史的連関が子どもにおいてその意味を失い「世界史の敗北」を意味する「墓標」と化しているという暗鬱な事態が読みとられる。子どもは「人類の未来に不可避」な「敗北」を直観しているというわけである。しかしこの「墓標」は子どもの遊びにおいてつねに変容する可能性をも秘めている。ここから著者は破局と救済の弁証法（「瓦礫の山＝アレゴリー」の救済可能性）というベンヤミンの歴史哲学の核心命題を子どもの遊びに関連づけて考察し、『幼年時代』と『歴史の概念について』の「架橋」を試みる。

第二部の最後に、『幼年時代』における子ども像とベンヤミンの模倣論・言語論との関連が考察される。一九三三年に書かれた『模倣の能力について』においてベンヤミンは彼が「非感性的類似性」と名づけた類似性を感知する能力を古代人と子どもに共通する能力とみなし、『言語社会学の諸問題』（一九三四／三五年）ではこのテーマを当時の言語学お

よび民俗学の言語発生理論と関連づけつつ敷衍する。類似性をめぐるベンヤミンの思考は初期のいわゆる「神秘主義的・観念的」言語論のモチーフを引き継いでいるが、本書は、初期の議論からこうした歴史的（系統発生的かつ個体発生的）議論への転換、つまり太古的・原初的模倣能力の保持者としての子どもへの着目が起こった契機として、息子シュテファン「観察記録」に注目する。従来のベンヤミンの言語論をめぐる議論において「資料」的扱いを受けることが多かったこの観察録の重要性の指摘は、本書の独自の知見のひとつである。著者によれば、「模倣の才能」が子どもにおいていかに保存・発揮されるかという息子の観察によって触発された関心が『幼年時代』として結実したことになる。こうした「模倣する能力」の一要素あるいは相関項として最後に取り上げられるのが子ども固有の「空想」が保持される世界としての「雲の故郷」のイメージである。著者は、言葉の誤解・歪みから生ずる「ムンメレーレン」のようなイメージを「雲」と名づけたベンヤミンをうけて、特定の故郷へのあらゆる「郷愁」が削除された後にもなお彼に失われずに残ったものこそ「雲の故郷」への憧憬だったと結論づける——その「雲（ヴォルケン）」は自分の身体を包みこむ（＝住ませる）ことで自分の個別的人称性を見えなくしてくれる「言葉（ヴォルト）」でもあるのだ、と。

「雲の故郷」に保持された「ベルリン」というテーマは、第三部で「家」としての書物という『幼年時代』の形式的・メディア的特質の問題へと接続される。亡命時代のベンヤミンが一冊の書物として刊行することができたのは『幼年時代』ではなく『ドイツの人々』だった。アドルノはゲオルゲ派の文学論やドイツ文学史へのベンヤミンの断固たる批判をモチーフに書かれたこの書と『幼年時代』との「奇妙な結びつき」に気づいていた。著者は両者がともにベンヤミンにとってナチスによって略取された記憶の「密やかな居場所」、つまり「家」だったと述べ、その家が『幼年時代』に登場する「ロジリア」のように定住者にとっては居住不可能な空間でありながら、まさにそれゆえに非定住者（亡命者）にとって逆説的に居住可能な場所となっていると指摘する。つまり著者の見立てでは、『幼年時代』はこうした「亡命者」のための「家」という意味で「書物」として構想されたのである。

アドルノは書物の本質を「傷つけられること」に見いだした。この傷は単に物質的なものにとどまらない。むしろ書物は著者の死後も生き続けるというそのメディア的条件により傷を受け、変容する。著者はアドルノによる『幼年時代』の出版自体もこの本につけられた傷であると指摘したうえで（アドルノは「削除・縮小」というベンヤミンの原則とは逆に、拡大された『幼年時代』を編集・出版した）、この「傷」もまた『幼年時代』の「死後の生」の一部であると解釈する。そして「傷」さえも新たな生の一部として取りこむこうした「変容」の力こそが「一冊の、ささやかな、本」というベンヤミンの構想のもつ「強靭さ」であり、彼にとっての書物の意義だったと結論する。

以上、本書の流れに沿って印象に残った箇所を中心に内容を素描したが、それが無知にもとづく蕪雑な要約となっていないことを願う。本書の主題と対象は明確に設定され、新たに使用可能となった一次資料を縦横に使いこなしテキストを丹念に読みこんだうえで展

開される論述は明快である。『幼年時代』の執筆と書物という形式に込められたベンヤミンの「真意」を明らかにしようとする著者の一貫した姿勢によって、この作品の特性がこれまでになく明確な像を結んでいると言えよう。この像が十分な説得力をもちうるかどうかは、議論の細部にかかっている。この点で評者は「神話」、「類似性」などの鍵概念をめぐる著者の解釈が時として語の日常的意味論の水準にとどまっているという印象を拭えなかった。また評者の関心に引きつけて言えば、類似性については「非感性的類似性」というベンヤミンの中心概念が取りあげられず、記憶・回想をめぐる議論においてもフロイトへの立ち入った論及が見られないことが気になる。同じく、『暴力批判論』に言い及びながら「神的暴力」（＝純粹暴力）は取り上げられないが、これは「子ども」を「歴史の天使」に媒介するための不可欠な項目ではないだろうか。意図的に論点を絞った結果なのかもしれない。だが、これらの概念について著者自身の突っ込んだ見解を知りたいと感じる読者は評者だけではないだろう。

総じて、本書が描き出す子ども像にはグロテスクさや悪意、あるいは毒といった要素が希薄である。ベンヤミンの思考にこれらの要素が欠落しているのか、そうであればこの欠如という視点からベンヤミンの思考の特性を読み直す可能性はないか——本書に刺戟されて評者はあらためてこのような問いに思いいたった。ともあれ、本書が今後『幼年時代』研究の基本文献のひとつとなる資格を十分に有する優れた作品であることは言を俟たない。